

小中連携教育・一貫教育を視点とした カリキュラム・マネジメントにかかる一考察

静屋 智

A study on Curriculum Management based on Integrated Education for primary and middle schools

SHIZUYA Satoru

(Received December 15, 2021)

キーワード：社会に開かれた教育課程，学校・地域連携カリキュラム，カリキュラム・マネジメント

はじめに

学習指導要領が改訂され、小学校、中学校ともに全面実施となっている。この学習指導要領では、これまで実践し蓄積してきた学校教育の取組を生かして、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた「カリキュラム・マネジメント」の充実が求められている。学習指導要領の前文には、「これからの時代に求められている教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有することが求められる。そのため、それぞれの学校において必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携・協働によりその実現を図っていくという、『社会に開かれた教育課程』の実現が重要となる。」¹⁾と示されている。学習指導要領の全面実施に向けて、移行期間よりそれぞれの教育委員会単位や学校でも研修が行われているが、学校内の研修では「社会に開かれた教育課程」の実現に向けてという意識がなかなか感じられない。これからはめざすこと、目標とすることの基になっている理念というべきものの共有がまず必要ではないだろうか。特に学校運営協議会の委員、保護者との共有がとても重要である。もちろん、未来を生きる当事者であり、学校教育をとおしてよりよい成長を保障すべき児童生徒との共有が不可欠と考える。めざすことの共有がなければ、協働という姿は生まれず、成果（よくなってきたこと、改善されてきたこと等）の確認も曖昧になる。客観性・妥当性のある評価につながるエビデンスを求める必要がある。

山口県においては、「やまぐち型地域連携教育」を推進している中学校区での「学校・地域連携カリキュラム」の作成・活用を推進し、それを中心としたカリキュラム・マネジメントの充実を図ろうとしている。本稿では、カリキュラム・マネジメントについて、地域連携教育、小中連携教育・一貫教育を一体的に推進していく中で、学校現場の状況と取組の成果、これからの課題とすべきことについて考察するとともに、学校が組織として取り組む方向について論述する。

1. 学校・地域連携カリキュラムを核としたカリキュラム・マネジメント

1-1 社会に開かれた教育課程の実現に向けて

「社会に開かれた教育課程」の実現において、平成27年12月の中央教育審議会答申では、以下の点が重要になると示している。

- ① 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。
- ② これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。
- ③ 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会

教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。²⁾

「社会に開かれた教育課程」の実現をめざすには、学校と地域・社会が理念を共有すること、子供たちに育成すべき資質・能力を明確にすること、地域・社会との連携・協働を推進すること、このような視点が重要になると考える。

子供たちの人間形成にかかるよりよい成長の保障などは学校だけで行うものではなく、家庭や地域・社会との連携やつながり等の中でできるものである。よりよい学校教育の在り方や具現化に向けた取組を明示し、よりよい社会につながる過程に関わる全てので共有することが大切となる。

学習指導要領全体にわたり、子供たちに育成すべき資質・能力とは何か、その資質・能力と地域・社会がどのように関わるのか、地域・社会にどのようにつながるのかを明確にすることが求められている。その資質・能力を、どのように子供たちと共有し、どのように地域・社会に伝え共有していくかということが、現在の学校に求められている。また、教科・領域等を視点とした育成すべき資質・能力のみならず、カリキュラム・マネジメントを意識した教科横断的な視点や、関連・つながりといった点からの共有も大切にしたい。特に総合的な学習の時間、特別活動を軸にしたカリキュラム・マネジメントの全体構造については、これまでの取組においてめざしてきた子供像・目標としてきたことにかかる資質・能力を一度整理し、それを踏まえた評価・再構成をしていく必要があると考える。

1-2 学校・地域連携カリキュラムの充実に向けて

山口県では、県内全ての公立学校で取り入れているコミュニティ・スクール・地域協育ネットの仕組みを生かした取組として、県独自の特徴的な「学校・地域連携カリキュラム」の作成・充実を図り、学校と地域が一体となった取組の充実を推進している。「学校・地域連携カリキュラム」の定義としては、山口県教育庁義務教育課と地域連携教育推進室が示している「学校・地域連携カリキュラムを生かした社会に開かれた教育課程の実現」³⁾において、「社会に開かれた教育課程の視点をもとに、学校と地域が連携・協働する教育活動を体系的に示したカリキュラム」とし、より一層の充実をめざすものとしている。ここでは、本研究紀要51号に掲載した「新しい学校づくりを推進するカリキュラム・マネジメントにかかる一考察」で論述したことを踏まえて述べる。

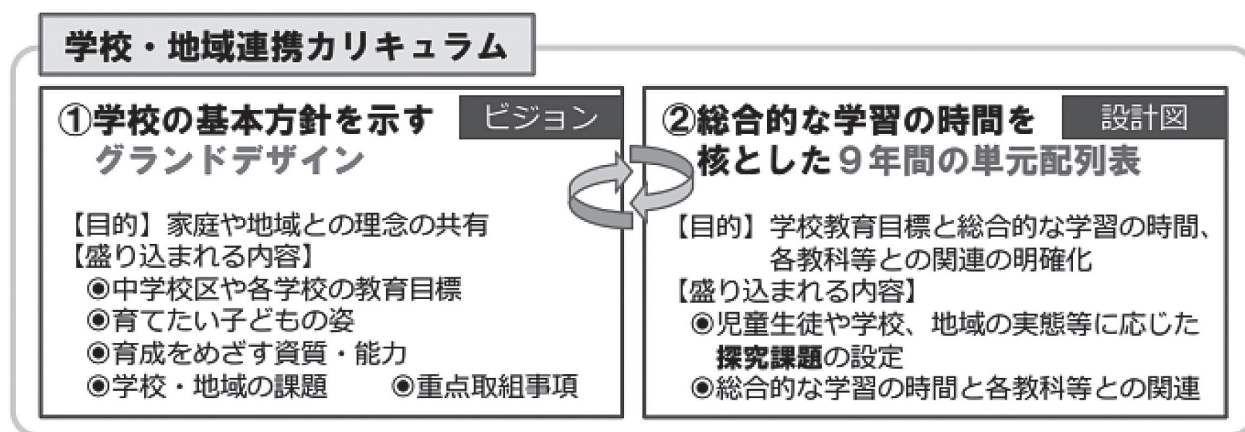


図1 学校・地域連携カリキュラムを生かした開かれた教育課程の実現

【学校・地域連携カリキュラムとは】

図1は学校・地域連携カリキュラムの全体の構造を示すものである。①「学校の基本方針を示すグランドデザイン」と②「総合的な学習の時間を核とした9年間の単元配列表」を効果的に活用し、各学校の教育活動の質を高めること（カリキュラム・マネジメント）が重要としている。「学校・地域連携カリキュラムのビジョンと設計図についての位置づけを示して、そこに必要となる「目的」と、「盛り込まれる内容」を例示している。ビジョンであるグランドデザインで示してあることについて述べる。

【目的】 家庭や地域との理念の共有

この家庭や地域との理念の共有がはたしてどの程度できているであろうか。学校運営協議会と一体となって学校運営をマネジメントとしている学校では、熟議（児童生徒も含めていることが多い）を重ねて理念

の共有を図っているが、ここでの共有の程度の差が大きいと感じる。同じ市町教育委員会管内、同じ中学校区内の学校でも取組に差が見られる。その要因の一つとして、学校組織マネジメント（中学校区全体としてのマネジメント、個別の学校としてのマネジメント）のシステムと実現状況の差が挙げられる。学校組織マネジメントを教職員全員で取組もうとする学校と、限られた者で行おうとしている差であるとする。あるミドルリーダー研修会で、「学校組織マネジメントは、管理職が行うものであると考えていませんか」と尋ねたことがある。「学校評価書の作成と一緒に参画していますか」と併せて尋ねたが、反応はよくなかった。カリキュラム・マネジメントが機能していくためには、学校運営に必要なさまざまなマネジメントが組織マネジメントとかみ合って運動していくことが前提ではなからうか。それを基盤として、「家庭や地域との理念の共有」がある。

【盛り込まれる内容】

グランドデザインはほとんどの学校が作成しており、○「中学校区や各学校の教育目標」、○「育てたい子どもの姿」、この2つの項目の表示は確実にある。○「育成をめざす資質・能力」についても多くの学校で記載されているが、これまでの学校の実践において、育成をめざす資質・能力というキーワードを意識した取組があまり見られない。それに関わる記述やフレーズはあるが、児童生徒と共有するレベルでの記述、児童生徒による「育成をめざす資質・能力」に対する振り返り(評価)はあまり見ない。教職大学院の授業等においてはいつも「成果を何で見ようとしているのか、その成果の確認は何をもってどのようにしているか」を意識させているが、学校における取組に対する評価の水準を意識する必要がある。普段の授業においても、一人ひとりの児童生徒の資質・能力にかかる「実現状況の程度の確認(評価)」が大切である。

1-3 学校・地域連携カリキュラムのマネジメント

①グランドデザインの見直しポイント		☑チェックしてみましょう！
内容面	<input type="checkbox"/> 育成をめざす資質・能力、育てたい子どもの姿等を明記し、互いの関連を示している。 <input type="checkbox"/> より多くの人分かるような平易な表現にしている。	運用面
		<input type="checkbox"/> 校外外の掲示等を用いた見える化を図り、学校、家庭、地域が共有に努めている。 <input type="checkbox"/> 学校評価等と関連させるとともに、学校運営協議会等で課題等を話し合い、常に見直す機会を設けている。
②9年間の単元配列表の見直しポイント		☑チェックしてみましょう！
内容面	<input type="checkbox"/> 総合的な学習の時間の探究課題を明記するとともに、教科等横断的な視点で組み立てている。 <input type="checkbox"/> 9年間を見通して、地域資源を活用した教育活動を設定している。	運用面
		<input type="checkbox"/> 小・中学校がともに見える化に努め、9年間の計画と日々の教育活動との関連を常に確認している。 <input type="checkbox"/> 育成をめざす資質・能力等により、教育活動の成果と課題を随時検証している。

図2 学校・地域連携カリキュラムを生かした開かれた教育課程の実現
【学校・地域連携カリキュラムの質をより高めるために】

図2は「学校・地域連携カリキュラムの質をより高めるために」という視点でまとめられたものである。学校・地域連携カリキュラムの質を高めるためには、実践を重ねていく中で再構成・マネジメントが必要となる。「グランドデザイン」においても「9年間の単元配列表」においても作成したから完成ではなく、あくまでもそれをもとにして「よりよいものに付加・修正をしていく基になるもの」とあるという認識が必要となり、再構成・マネジメントしていくことが求められる。図2の見直しのポイントについて述べる。

○より多くの人分かるような平易な表現にしている。

学校で作成しているグランドデザインは、教職員が作成し教職員が共有している。社会に開かれた教育課程をめざしていくのであれば、学校がめざしているこれからの学校の在り方、方向性をより多くの人と共有していくことが不可欠となる。保護者や地域住民にも伝わるように伝わりやすい平易な表現を用いたバージョンのグランドデザインが必要となる。ここでポイントとしたいことは、児童生徒との共有パー

ジョンの作成である。中学校では1種類でもよいが、小学校では中学校版をベースにした高学年用と中学年用があると伝わりやすい。日々の教育活動において、各授業、行事などそれぞれの教育活動を「何のために行うのか、何故やるのか」、「どのようなことが大切になるのか」など、児童生徒のこれからのよりよい成長につながる思考・判断を活動の中で繰り返せるように、めざすもの・目標の共有が必要である。指導する教職員や関係者、保護者・地域住民などの児童生徒の人的環境である大人がめざすもの・目標の共有をすることは当然であるが、それを受け止める側である児童生徒の意識・態度が重要である。カリキュラム・マネジメントの本質、スタートは、児童生徒とのめざすもの・目標の共有であると考えられる。

○校内外の掲示等を用いた見える化を図り、共有に努めている。

学校を訪問して注目するもののひとつが、校内掲示である。校内掲示の役割は、学校の教職員間の共通理解を図るもの、教職員同士が確認し合うもの、また来校者へのメッセージ（学校のめざしているもの・目標、児童生徒の成長の跡、学校・学年・学級の取組の継続的な記録など）であるが、学校掲示を最も目にしているのは児童生徒である。教職員間の共有や来校者へのメッセージの中に「児童生徒へのメッセージがあるか」という視点を持ってほしい。教職員と同様に、児童生徒にとってもめざすもの・目標の共有・確認は必要である。もちろん、ただ掲示しておけば良いというものではない。担任をはじめ全教職員がその掲示の意味や価値、願い等をきちんと児童生徒に伝えるべきである。このことを「指導すべきこと」として認識すべきである。教職大学院・院生に対してはそれに加えて、保護者や地域の方が掲示作成に参画できるようなシステムづくりを提案している。簡単なものとしては、掲示物に簡単なメッセージ付箋紙を貼ることや、感想カードを記入する等である。空き教室や廊下・通用口等に掲示スペースがある場合は、保護者・地域の方用の掲示コーナーの設置を提案したい。保護者・地域の方も教職員と同じプロジェクトに参画してもらっている学校が少しずつ見られるが、掲示コーナーがひとつの活躍の場となり「やりがい」にもつながるのではないだろうか。

学校掲示の場所としてのポイントは、校長室・職員室まわりのスペース、そして児童生徒用の昇降口まわりのスペースである。いずれもメッセージを受け止める側の視線を意識した場所となる。何度も繰り返し確認するために大切な場所となる。メッセージの有効性を考えた場合、掲示の意図的な変化も必要となる。生徒会や委員会活動でのアンケートや、チャレンジ目標の達成状況等は、児童生徒同士が意見交換して意識を高め合う内容となる。比較的短いスパンでの変化と「自分たちごと」のプラスづくりにつながる取組が期待される。

○学校評価と関連させるとともに、学校運営協議会等で課題等を話し合い、常に見直す機会を設けている。

学校組織マネジメントを機能させていくためには、学校評価を核とした評価・確認の連動が不可欠であると考えている。PDCAマネジメントサイクルにおいて、R-PDCAというとらえ方が提唱されている。R（リサーチ）は現状分析であるが、ここでの分析の視点が重要となる。ここで「何のために行うのか、何故やるのか」、「どのようなことが大切になるのか」「どのように取り組むことが必要か」という視点で整理した上でのP（計画）にならないと、C（評価）につながらない。C（評価）において、成果として何を確認したいのか・確認すべきかを、P（計画）段階で具体化しておかなければ、D（活動・実践）場面での指導・支援に生かされずに、振り返り・C（評価）も曖昧なものになりがちである。学校における教育活動をそれぞれの取組として扱うのではなく、「これからの学校の在り方」を追究していく全体構造として捉え、その全体構造を意識したPDCAマネジメントサイクルが学校評価の取組において重要となる。このような意識を共有するために、学校運営協議会を巻き込む学校の管理職・プロジェクトリーダーの戦略会議とそれぞれのリーダーシップが求められる。

全公立学校がコミュニティ・スクールであり、全ての中学校区で地域協育ネットの取組が行われている山口県において、キーポイントとなるのは学校運営協議会の位置付け・取組ではないだろうか。筆者としては役割としての「承認」の意味合いを大きく捉えすぎていると感じる。学校評議員制度との違いを明確にして学校運営協議会委員としての役割と責任の確認が必要ではないだろうか。学校運営協議会の開催回数・時期や時間設定、協議会の内容や協議・熟議のための事前の打ち合わせや調整等に多くの課題を感じている。PTAの組織や役員の在り方もずっと以前からのシステムが踏襲されているように感じるが、これからの時代や地域の実情・状況に合うようなシステム・構造が必要ではないだろうか。「これからの学校の在り方」を模索しながら社会とのビジョンの共有をめざしている学校の取組は、教職員だけではすでに対応しきれない状況になっていると言われている。それだからこそ、学校にかかる教育活動・取組につ

いて、これまでの学校内の教師による仕事から、保護者や地域住民の参加・参画による協働が望まれる。

○総合的な学習の時間の探究課題を明記するとともに、教科横断的な視点で組み立てている。

学習指導要領の改訂において、カリキュラム・マネジメントの重要性があらためてクローズアップされている。筆者は以前からカリキュラム・マネジメントの中核になるのは、「総合的な学習の時間、特別活動、道徳」であると述べてきた。道徳は特別な教科・道徳として位置付けられて今でこそ教科書があるが、総合的な学習の時間、特別活動には教科書がない。これは指導することと評価すべきことを、学校が判断して決定するということにもなる。多くの教職員との対話の中で感じるのは、単元、題材、行事、取組を「何のために行うのか、何故やるのか」、「どのようなことが大切になるのか」等の視点で分析をあまりせずに繰り返していることである。「年間計画にあるから、去年のこの学年でもやっていたから」「今までやっていて改善の必要を感じないから」等の意見から変わらないことが多い。カリキュラム・マネジメントとしてのC(評価)分析等を踏まえたA(改善)の手続きをほとんどせずに、ほぼこれまでの計画で活動をスタートしているのではないだろうか。簡単なPとDが繰り返される。このような取組においては、目標としての記述はあるものの、児童生徒の資質・能力を意識した記述はあまり見られなかった。さらに振り返り・評価においても資質・能力を視点としているものは見えにくく、抽象的な表現に留まっていた印象がある。エピソードとなるものはあっても、エビデンスにはならない。

高等学校で探究的な学習が実践される。高等学校に接続する中学校でその学びの準備はできているだろうか。もちろん中学校の学びにつながる小学校での学びについても、同様のことが言える。山口県教育委員会が作成している「カリキュラム・マネジメントの手引き」⁴⁾においては、「総合的な学習の時間の目標については、学校の教育目標との関連を図り、児童生徒や学校、地域の実態に応じてふさわしい探究課題を設定することができるという総合的な学習の時間の特質が、各学校の教育目標の実現に生かされるようにしていくことが大切です」として「内容の設定に際し、『目標を実現するにふさわしい探究課題』、『探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力』の2つを定める必要があります」とある。中学校での総合的な学習の時間の内容とこれまでの実践が、探究的な学びになっているかという点で分析し整理することが大切になる。その分析・整理の視点として、「授業実践をとおして育成された具体的な資質・能力は何であったか」がポイントになる。さらに、その「育成の実現状況はどの程度か」という水準を意識したエビデンスでなければ、客観性・妥当性は生まれず、一般的に伝わらない。社会との共有は難しいということになる。現状分析を全教職員で行い、これまでの実践や児童生徒の学びについての成果と課題を熟議し整理することで再構成を行う。全教職員による共有と協働によるこの手続きが、それぞれの学校でのカリキュラム・マネジメントの新たなスタートとなる。

○小・中学校がともに見える化に努め、9年間の計画と日々の教育活動との関連を常に確認している。

9年間の単元配列表は、全ての学校で準備されていると聞いている。中学校区全体としての一覧表を作成している地域もある。単元配列表は何故作成するのか、作成してどのように活用するのかについて、それぞれの学校ではどのような共有がされているだろうか。カリキュラム・マネジメントを全教職員で実践していくためにも、校内研修会での熟議を提案したい。「この9年間の単元配列表をどのように活用していけば、今よりもプラスがつけられるだろうか」というテーマで、「プラスをつくること」を視点として、小・中学校の教職員、児童生徒、保護者、学校運営協議会、地域・社会で思考・判断し、協働してまとめていく。「○○○について、どのように活用していけば、今よりもプラスがつけられるだろうか」というようなテーマであれば、できない理由・やらない理由を述べる状況にはない。やることを前提として意見交換をするので、建設的な熟議になる。参加する全員が、「自分ごと」として捉え、「自分たちごと」を意識した発言・提案ができるという期待がある。

○育成をめざす資質・能力等により、教育活動の成果と課題を随時検証している。

育成をめざす資質・能力等により、教育活動の成果と課題を検証しているかについては、「何が身に付いたのか」の観点から、どの程度身に付いたのか、それを何で確認するのか、というエビデンスが大切になる。誰にも伝わること、誰もが納得できるようにするために、「意識・行動の変容」の見える化と、記憶に残る記録の見える化・ポートフォリオを工夫していくことが重要であると考え。筆者は教育活動の成果は、「児童生徒の意識・行動の変容」の姿がその中核となるとこれまでも述べてきた。意識・行動の変容は見えにくい。見える化につながるものは、児童生徒の自覚化、メタ認知の状況であると考え。学校を訪問して、管理職や教職員に「○○の取組については、どのような状況であるか」と尋ねても「だん

だんよくなってきている」「評価が上がっている」等、抽象的な回答が多い。それも学校や教師側から見た感想的なもので、自分が見たことや感じたこととの違い・差がある。児童生徒に対するアンケートや調査の回答に基づいたエビデンスとエピソードが必要と考える。児童生徒の学習カードによる振り返りや授業評価、学校評価における学校関係者評価での回答や記述について、丁寧な説明と指導が求められる。

現在、児童生徒には一人1タブレットが配布されている。それによって、指導内容や指導方法に多くの工夫・改善が見られるようになり、児童生徒の「主体的対話的な学び、深い学び」に向かう姿も、学校による差はあるものの、ほとんどの学校で見ることが出来る。この状況をスタートとして、ぜひ児童生徒が「自分の学習をコントロールする力」（自己マネジメント力、自己指導・調整力）を身に付けてほしい。教師が児童生徒の「意識・行動の変容」を語る根拠を、児童生徒一人ひとりの「自分の意識・行動の変容の程度、自覚化」としてほしい。タブレットに自分の成長の記録を、言葉で、画像で、映像で、自分ごととして残してほしい。これまでは教師が取組の評価のために記録することが多かった。そのため教師の仕事量は増え続け、記録の質・量において個人差が生じていた。児童生徒自身が自分のために記録し整理することで、思考・判断を繰り返し、確認しながら学びを積み重ねていく。その過程で大切な資質・能力が育成されるのである。教師は、児童生徒の記録・ポートフォリオを確認し、集約・整理しながら、次への指導につなげていく。この姿が「指導と評価の一体化」につながると考える。このような取組が、「児童生徒と共に進む、協働から生まれるカリキュラム・マネジメント」の姿ではないだろうか。

2. 実践から見る学校・地域連携カリキュラムのマネジメント

2-1 下関市立夢が丘中学校区の取組

山口大学教職大学院学校経営コース4期生、小森晃子教諭（下関市立夢が丘中学校、令和3年3月修了）の研究実践に基づいて、学校・地域連携カリキュラムにかかるポイントについて述べる。

令和3年度「夢が丘中学校区小中連携指標・地域連携カリキュラム」

		育てたい資質能力									
		自ら考えて									
		学ぶ力		伝え合う力		行動する力					
小中連携指標		1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目	7年目	8年目	9年目	
項目	重点取組	川瀬小学校・小串小学校・宇賀小学校・豊浦総合支援学校小学部						夢が丘中学校・豊浦総合支援学校中学部			小中学校の9年間で身につけたい力・姿
知	学習習慣の充実	〇決められた宿題を丁寧に確実にやる。	〇自主学習の進め方を知る。	〇自主学習の内容を自分で決めて取り組む。	〇テスト週間(1週間)の計画を立て、見直しをもつて学習する。	〇締めくくることができるよう長期計画を立てて学習する。	80分	90分	100分	家庭学習の習慣を身につける。 時間と内容を考え、自主的・計画的に学ぶ。	
	家庭・地域	〇学習内容を確認する。	〇家庭学習の時間と場所を決める。	〇自主的・計画的な家庭学習の習慣を促す。							
徳	あいさつ	〇あいさつの大切さを知り、笑顔であいさつをする。	〇自分から進んで気持ちの良いあいさつをする。	〇時と場を考え、心のこもったあいさつをする。	〇礼儀正しく、感じの良いあいさつをする。					相手の気持ちや考えを察したり、自分の考えや気持ちを誠実に伝えたりすることで、より良い人間関係を築く。	
	気持ちや考えを伝える・受け取る	〇自分の考えや気持ちを自分から伝える。 〇相手の話を最後まで聞く。	〇自分の考えや気持ちを自分の言葉でわかりやすく伝える。 〇相手の気持ちや思いを考えながら聞く。	〇自分の考えや気持ちを自分の言葉でわかりやすく、はっきりと伝える。 〇相手の気持ちや思いを理解しながら聞く。	〇自分の考えや気持ちを相手に伝えている。 〇相手の気持ちや思いに寄り添いながら聞く。						
体	掃除	〇自分に与えられた場所や役割分担を理解して掃除をする。 〇掃除道具を元の場所に片づける。	〇掃除道具を正しく使って掃除をする。 〇黙って時間いっぱい掃除をする。 〇必要な所を見つけて掃除をする。	〇自分の役割を果たすことはもちろん、自分から仕事を見つけて掃除をする。	〇自分で気づき、感謝の気持ちを込めて、掃除をする。					奉仕の心をもって、自ら行動する。	
	時間	〇時計を見て生活する。	〇次の活動の準備をしてから5分休憩に入る。	〇0分スタート(授業開始)を徹底する。 〇2分前行動(着席)・1分前黙想を意図する。	〇2分前行動(着席)・1分前黙想をする。 〇学校生活・家庭生活において、時間を意識し、計画的な生活を送る。					時間を守り、有効に使う意識をもつ。	
家庭・地域		〇時間や手洗いなどの具体的な約束を設ける。 〇地域の清掃行事や祭への参加を促す。 〇地域のために自分ができることを意識させ、将来の夢や志につなげる。									

図3 夢が丘中学校区小中連携指標

図3は「夢が丘中学校区小中連携指標」⁵⁾である。この指標の作成目的は、「中学校区の全教職員が児童生徒の成長に応じた指導方法を理解するとともに、児童生徒一人ひとりが9年間の自分の成長を見通し、各学年における目標を持って生活することができるようにする」である。この小中連携指標の作成に向けた戦略が中学校区での一体的な取組につながったと考える。取組を進めていく中で、教職員、児童生徒、学校運営協議会委員等の意識・行動の変容につながる手立てや、実現状況の程度を確認するための継続的な評価活動が組み込まれていき、「協働するよさの実感」につながったと捉えている。

小中連携教育を推進するリーダー組織は、1中学校に接続する3つの小学校から、それぞれ3名ずつの推進リーダー教員で構成された。管理職の校長4名、教頭4名はそれぞれのチームで推進リーダーチームの取組をサポートする体制をとり、表面での推進リーダー教員の活躍の場をアピールする役割であった。このことで、各校のミドルリーダーとしてのリーダーシップが発揮し易くなり、連携も強化された。次年度から中学校区内にある豊浦総合支援学校も推進リーダー組織に加わり、地域が一体となって児童生徒のよりよい成長を支えるという意識が高まった。令和元年8月の小中合同研修会で「夢が丘中学校区小中連携指標」の原案が提案され、年間3回の推進リーダー会議と日常的な情報交換で令和2年度版が作成されていった。作成過程の中で留意したのは、完成型を求めずいつも再構成していくこと、リーダーが進捗状況を全教職員に伝えていくこと、作成途中段階から生徒に示し生徒の意見等も反映しながら共有すること等である。生徒との共有は、「あいさつ活性化に向けた取組」においては、生徒一人ひとりの達成度と自分たちの学年の達成度をアンケートし、学級委員会と生徒会が分析し次への取組の具体的な提案をしていくことにつながった。生徒が「主体的に、対話を通して」思考・判断し、計画・実行し、評価・改善を繰り返すサイクルの意味やよさを実感する姿が見られた。このような教職員や児童生徒の「意識・行動の変容」につなげて行く取組は、全教職員による「小中地域連携カリキュラム」の作成や、全児童生徒と地域を巻き込んでの「あいさつの歌づくり」においても生かされた。

2-2 学校・地域連携カリキュラムの具体

図4は「夢が丘中学校区小中・地域連携カリキュラム」である。この原案の作成に向けて、学校ではこれまで取り組んできた「地域と連携して学ぶ活動を洗い出し、生徒の参加は実現できなかったが、教職員、学校

小中・地域連携カリキュラム 地域と連携して学ぶ活動											
事項/学年・地域	川棚小学校・小串小学校・宇賀小学校・豊浦総合支援学校小学部						夢が丘中学校・豊浦総合支援学校中学部			地域	
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	1年	2年	3年		
川棚小	(生)きせつとあそぼう～あき～あきつよう (生)もうすぐ2年生～あたらしい1年生を招待しよう	(生)のすてきな発見 (生)わたしたちの野菜畑 (調)図書館探検	(社)学区探検 (社)農家の仕事 (社)店で働く人 (社)火事から人を守る (調)川棚のよさを発掘しよう 自転車教室	(社)のきしたいもの、つたえたいもの	(調)みんなが過ごしやすいまち報告文を書こう	(調)「松井さんの笑顔」 (社)戦国体験講話	(社)豊浦町の歴史 (家)ゆかた着付け (家)調理実習 (体)救急箱・AED講習 (特)自転車教室 (調)職業講話 (調)職場体験 (調)卒業生講話 (調)立志式 (調)学校説明会 (特)夢ボラ・わくわく学習スクール	(家)保育実習 (家)調理実習			公民館まつり 自転車大会 歌者の集い 川棚神社祭 奉納すまじ/秋祭り スポーツ少年団 わたしの主張作文発表会 放課後子ども教室
	(調)読み聞かせ (体)ロードレース大 (調)図書の見直し	学習支援ボランティア (行)もちつき 毎日の昼下校での交通指導	クラブ活動 歌舞伎、青龍太鼓 (体)運動会 ごみをひろいながら登校 全校授業参観日	(行)伝統集会 全校授業参観日	(行)子どもパトロール感謝の会 (行)避難訓練						
	(生)夏野菜・さつまいも田植え (生)地域探検・海遊び (生)さつまいも収穫・焼きいも (生)冬野菜苗植え	(調)エヒメアヤマ見学 (調)こもり見見学 (生)こども110番の家探検 魚つり大会	(調)エヒメアヤマ見学 (調)こもり見見学 (行)自転車教室 (調)エヒメアヤマ見学 (調)ヤマグチサンショウウオ放逐 (社)商店の見学	(調)ヤマグチサンショウウオを育てよう (調)田植え (調)稲刈り	(調)田植え (調)稲刈り	(調)さつまいも祭り (調)小串の地域・歴史を知ろう					山上がり 小串見守り隊ひびき 放課後子ども教室 川中神社祭り 小串の海を知ろう厚島探検 空の駅体験館ゆつた大作 盆踊り (1・2年)敬老祝賀会 (3・4年)公民館まつり 浄天山登山 しめ縄作り 門松作り わたしの主張作文発表会
	(生)おもちゃランド (生)昔の遊び (生)だくあん作り		(調)エヒメアヤマ見学 (調)ヤマグチサンショウウオ放逐 (社)昔の道具見学								
	(朝)読みきかせ(聞く) クリーン作戦	学習支援ボランティア どんど焼き	(行)運動会 郷土民謡 (行)ふれあい発表	(行)ふれあい発表	(行)避難訓練 (体)持久走大会						
			(生・調)JAの方の協力による野菜の苗植え (生)むかしの遊びを教えよう (生)町たんけん (調)町たんけん (調)町たんけん (調)町たんけん	(調)1/2成人式 (調)町たんけん (調)町たんけん (調)町たんけん	(調)町たんけん (調)町たんけん (調)町たんけん	(調)町たんけん (調)町たんけん (調)町たんけん					放課後子ども教室 歌者の集い 宇賀川稲宮すまじ大会 つばき祭り サマーキャンプ わたしの主張作文発表会 宇賀見守り隊
			(調)町たんけん (調)町たんけん (調)町たんけん	(調)町たんけん (調)町たんけん (調)町たんけん	(調)町たんけん (調)町たんけん (調)町たんけん	(調)町たんけん (調)町たんけん (調)町たんけん					
			(調)町たんけん (調)町たんけん (調)町たんけん	(調)町たんけん (調)町たんけん (調)町たんけん	(調)町たんけん (調)町たんけん (調)町たんけん	(調)町たんけん (調)町たんけん (調)町たんけん					
			(調)町たんけん (調)町たんけん (調)町たんけん	(調)町たんけん (調)町たんけん (調)町たんけん	(調)町たんけん (調)町たんけん (調)町たんけん	(調)町たんけん (調)町たんけん (調)町たんけん					
	総合										
小中連携	(給食)地産地消 キャリア・バスポート 毎月第3週「あいさつチャレンジ週間」 あいさつの歌										

図4 夢が丘中学校区 小中・地域連携カリキュラム

運営協議会代表者、PTA役員代表者が集まり、各校・学年別に付箋紙に書き出し一覧表にまとめられた。「夢チャレネット」合同研修会でのこの活動は、「思っていた以上に地域との関わりの多さを再認識した」「今後、どのように地域と関わることができるのか、地域の方と見直し再検討していく必要があると感じる」等の教職員の意識の変容につながる感想が見られた。多くの学校では総合的な学習の時間と特別活動を主軸として各教科との横断的な取組の可能性を見るような一覧表が作成されている。夢が丘中学校区の特徴は、これまで地域と連携して取り組んできた活動をもとに、児童生徒の資質・能力の向上に資すると確認したものを、保護者・地域とともに整理して示したことにある。表の縦軸右端の欄は「地域」としての行事・取組が位置付けられ、中学校区でのつながりをつくり共有し、協働する意欲を高めるベースになっている。これを基に、総合的な学習の時間、特別活動を軸とし、伸ばしたい資質・能力を位置付けたタイプの学校・地域連携カリキュラムの再構成も行われると考える。今後、ずっと「夢ボラ（夢が丘中・ボランティア活動）」を継続し、委員会組織にボランティア委員会も創設した夢が丘中学校にとっての特色になるものとして、夢ボラの一部を教育課程に位置付け（総合・特活）、地域へ発信していくことを期待している。

室積学園・地域連携カリキュラム

学園教育目標「日本一学びが好きな『むろづみっ子』の育成」

めざす子ども像「自分を見つめ、夢をもち、人との関わりを大切に、地域を愛する子ども」



子ども像	付けた力	めざす視点	学連協	教科														
				小1 (1年目)	小2 (2年目)	小3 (3年目)	小4 (4年目)	小5 (5年目)	小6 (6年目)	中1 (7年目)	中2 (8年目)	中3 (9年目)						
自分を見つめ、夢をもつ子ども	夢を描く力	キャリア教育 生涯学習	学び部会	五感を磨く	体にしみこむ経験をする	豊かな情操を養う	先人の知恵を知る	伝統を守る	将来を描く									
				アサガオリース(生) 秋まつり(生) Let'sダンス(体)	七輪体験(社)	星空観察会 M 10歳の志	ソウイング・モン(楽) 地域連携センター(社) 陶芸教室 陸上教室(体) しめ縄づくり(工作クラブ) 水泳練習(体) 読み聞かせ(国) N CS講演会 算数スキルアップ教室	中学校見学・運動会予行 一日入学(1月)	宿泊学習	職業講話 立志式 松の植樹 三世代交流学習 ハートフルDAY in 光 人権教育参観日・講演会 全校合唱(音) 地踊り練習(体) 年賀状作成(国)	Q 空模応援レリー 未来のひまわり(家) 進路説明会							
人との関わりを大切に子ども	人と関わる力	人間関係形成力 地域貢献	ボランティア部会	人と出会う	ボランティアと出会う	ボランティアの良さを体験する	人とよりよく関わる力を身に付ける											
				A 校外学習(生) 通学路をきれいにし住みよい町にしよう(生)	ボランティアの良さを体験する	人とよりよく関わる力を身に付ける	プール清掃(体) 避難場所の整備 敬老の日のつどい(会祭)	E 海洋清掃(小4と一緒に) 地域清掃ボランティア K 愛校ボランティア、普賢祭早朝清掃 学校環境整備、とおちゃんの会 赤い羽根共同募金活動、おっぴま祭りボランティア 七草がけ接待 竹の切り出し、門松づくりボランティア わら打ち、しめ縄作りボランティア 室積まちづくりふれあい祭りボランティア										
地域を愛する子ども	地域の未来を見通す力	郷土愛	ふるさと学習部会	地域とふれあう	地域を知る	発信する	地域とともに活動する	地域の一員として自覚する	地域行事を企画運営する	室積の未来を考える								
				G 昔遊び(生) 公園へ行こう(生) さつまいも料理(生)	H 室積探検(社) 室積のよさを伝えよう	B こも巻き 防災学習(社) 木遣り歌(音) フジバカマ植樹(理)	田植え C 稲刈り かかし贈呈	私たちの地域と福祉 ふるさと学習 ウォークラリー 室積地区運動会	L 早長祭									

図5 室積学園・地域連携カリキュラム

図5は室積学園・地域連携カリキュラムである。⁶⁾ 室積学園(室積中学校と室積小学校との小中一貫教育をめざす総称)の取組は、山口大学・教職大学院5期生の宮内朋子教諭を推進リーダーとして全教職員、学校運営協議会、PTA組織が一体となって連携・協働してつくりあげてきているものである。この取組では、コミュニティ・スクールとしての教育活動を推進していく小中学校を一貫した組織として「学び部会」「ボランティア部会」「ふるさと学習部会」を位置付けている。作成上のポイントとしては、令和2年度の学校運営協議会の中で、教職員、地域代表、保護者代表で3回の熟議を通して、地域とともに学ぶ学習のねらい・目的、活動内容の共有ができたことである。小中9年間での成長について、「地域の中に入り、地域に

ついて知る、地域と一緒に活動する、地域のために何ができるか考える子どもを育成する」ことを軸として3つの部会での中核となるものを構成している。そして、児童生徒に身に付けさせたい力を「夢を描く力」「人と関わる力」「地域の未来を見通す力」に整理して、カリキュラムを再構成している。さらに小中合同で取り組むべき学習を部会で協議しながら、児童生徒のよりよい成長を中心に置いた学校・地域の連携・協働につなげることを大切にしている。

2-3 学校評価との連動

学校組織マネジメントを機能させていくためには、学校評価を核とした評価・確認の連動が不可欠である。とりわけカリキュラム・マネジメントにかかる評価は、現在の学校において学校組織マネジメントの中心に置くべきものであると考えるので、学校評価の関係者評価においても重要な位置付けになるべきであるとする。室積学園においては、前述の3つの力を付けるためにそれぞれの部会ごとの評価を、「室積学園として付けたい資質・能力」を視点としたものに再構成している。

○学び部会 「夢を描く力」を付けるために

- ・学習理解、学習準備、家庭学習、体力向上、目標努力

○ボランティア部会 「人と関わる力」を付けるために

- ・言葉遣い、規範意識、情報モラル

○ふるさと学習部会 「地域の未来を見通す力」を付けるために

- ・郷土愛 地域行事への参加 防災教育

表1は室積学園・学校評価の学校関係者評価、児童生徒用の部分(室積中学校生徒用)である。ここに示した評価項目・内容に準じて、児童用(室積小学校児童)があり、保護者対象、教職員対象、学校運営協議会委員対象としてそれぞれ小学校、中学校に分けて作成されている。学校と保護者・地域が一体となり、連携・協働して作成されたアンケート・評価項目は貴重であり、今後、多くの学校の取組の参考になるものである。

表1 室積学園・学校関係者評価アンケート部分(室積中学校生徒用)

	生徒 (室積中)
目標	①室積学園教育目標「日本一学びが好きなむろづみっ子の育成」が達成できるように自分なりに努力している。
夢を描く力	②学校の教科の授業で学習したことについて、おおむね理解することができている。
	③宿題や教科の忘れ物がないように学習準備をしている。
	④毎日家庭学習(宿題、自主勉強など)を行っている。(塾での学習も含める)。 ※時間の目安(平日) 1年・・・1時間 2年・・・1.5時間 3年・・・2時間
	⑤自らの体力の向上に意識的に取り組んでいる。
	⑥中学校卒業後の進路について、自分なりの思いやイメージをもち、それに向けて努力することができている。
人と関わる力	⑦相手を思いやる言葉づかいができている。
	⑧きまりを守り、人に迷惑をかけないよう気をつけている。
	⑨「室積っ子ネット安全ルール」を守って生活することができている。
地域の未来	⑩室積地域の良さを知っている。
	⑪地域行事に参加している。
	⑫非常時(災害・事故等)に際して、地域の一員として自分がとるべき行動がわかっている。
A	⑬誰に対しても、進んで明るいあいさつができている。
B	⑭清掃活動にきちんと取り組んでいる。
C	⑮時間を意識しながら行動することができている。
独自目標	⑯学校は楽しい。
	⑰先生たちは、あなたのことをよく考えて、話を聞いてくれる。
	⑱自らの健康を意識して規則正しい生活(早寝・早起き・歯磨き・排便など)を送ることができている。
	⑲室中タイムス(学校だより)やホームページなどを通じて、自分たちの活動の様子や学校の雰囲気が家族に伝わっている。

小中学校が共通の視点で同様の内容をアンケートすることで、結果の共有・分析においての有効性を感じる。また、独自目標として尋ねる部分も確保していることで、小中学校ごとに独自に取り組んでいることへの実現状況も確認できる。この学校評価にかかるアンケートに、児童生徒に「付けたい資質・能力」を位置付けた意味は大きい。アンケート調査の項目がある意味の啓蒙としての役割を持つことからすれば、めざすこと、大切にしたいこと等の共有の再確認ができるとともに、思考・判断・表現の視点にもなるからである。

今後において意識することは、それぞれの評価項目の具体的内容の分析である。例えば、「自分なりに・・・」「おおむね理解している・・・」「・・・きちんと、・・・よく」等について、水準や規準の共有の状況が問われる場合も考えられる。また、回答が4件法である場合、個の変容も集団の変容も見えにくくなり、分析も抽象的な分析に留まることが多い。4件法と併せて満足度・達成度で〇〇%の記述法で回答することで、より多様な結果の分析方法、表現方法、伝え方が可能になり、評価の妥当性や信頼度が上がると考えている。カリキュラム・マネジメントにかかる評価と、評価の基となる記録の集積・整理が重要となる。これからの学校づくり・地域づくりにつながる「プラスづくり」の推進・充実を支援していきたい。

おわりに

室積中学校の宮内教諭は、「『学校・地域連携カリキュラム』を学校運営協議会の熟議を通して作成したことで、カリキュラムが学校と家庭と地域をつなぐ媒体となったと実感できた」と述べている。子どもたちの環境である教職員、保護者、地域の方全てが「子どもたちへの思い・願い」等を共有して「自分たちごと」として関わることで、学校と地域の本質的な連携・協働につながっている。我々は「共有する、連携・協働する」言葉を、何度も文字として記し言葉として発してはいるが、そのことを実現していくことは、とても大変なことで多くの時間と労力を要する。それだからこそ、一つひとつのギアがかみ合っただけで少しづつ動き始めた時、成果として見えてきた時の喜びと感動は大きい。それぞれの学校の普段を大切にしたい貴重な取組を、未来に生きる子どもたちと共につなげ・紡いでいきながら、「社会に開かれた教育課程」の実現をめざして着実に前に進めていかなければならない。

参考文献

小学校学習指導要領解説 総則，文部科学省，2017.

「社会に開かれた教育課程」を実現する地域連携カリキュラム創造の第一歩，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第48号，2019.

学校教育の充実に向けた評価・改善にかかる一考察，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第50号，2020.

新しい学校づくりを推進するカリキュラム・マネジメントにかかる一考察，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第51号，2021.

引用文献

- 1) 小学校学習指導要領 前文，文部科学省，2017.
- 2) 「社会に開かれた教育課程」の実現，中央教育審議会答申，2015.
- 3) 「学校・地域連携カリキュラムを生かした 社会に開かれた教育課程の実現」，山口県教育委員会，2020.
- 4) カリキュラム・マネジメントの手引き，山口県教育庁義務教育課，2021.
- 5) 小森晃子：「学校の組織力向上を目指して ―3小1中施設分離型中学校区における小中連携教育の取組を通して―」，令和2年度日本教職大学院協会研究発表大会「ポスターセッション」発表資料，2020.
- 6) 宮内朋子：「学校・地域連携カリキュラムを通じた小中一貫教育の推進 ―地域とともにある室積学園をめざして―」，令和3年度日本教職大学院協会研究発表大会「ポスターセッション」発表資料，2021.